

【審査論文】

『伊勢新百韻』分析(下)

佐藤 勝明

An Analysis of *Iseshinhyakuin* (Part 2)

Katsuaki SATO

キーワード：俳諧・蕉風・かるみ・伊勢新百韻・地方

〈聞人ありと琵琶をさし置

仄止〉

はらくと暁^{あかつき}がたにちる木の葉

反朱

三才11 冬十月(木の葉)

〔句意〕夜明けが近いころ、木の葉がはらりと散っている。

〔付合〕①前句を屋外に近い部屋での演奏と見て、②弾くのをやめた後の周囲の様子を探り、③暁^{あかつき}がたに木の葉が散るとした。釣^{つり}そこなひて狐^こなを啼^{なく}

唐庭

三才12 雑

〔句意〕捕まえそとなった狐がなおも鳴いている。

〔付合〕①前句を林間などの景と見定め、②そこにいそうな生類を想像し、

③わなにもかからず狐が鳴いているとした。

〔備考〕ここでの「釣」は狐をわななどで捕えること。狐には木の葉を使って化かしを行なうとの俗信があり、その意味で、「木の葉」と「狐」は付合語の一種として機能していよう。

味噌^{みそ}を焼^{やく}うちに茶^ちづけを喰^く仕^し舞^ま

水甫

三才13 雑

〔句意〕味噌を焼いている間に、茶漬^{ちずけ}を食べ終えた。〔付合〕①前句を狐に逃げられた獵師の思いと見て、②そうした人々の山間における簡便な食生活を思い描き、③味噌が焼けるのももどかしく茶漬^{ちずけ}をかき込むとした。

〔備考〕あぶり焼いた味噌は香ばしく、簡単なおかずとして重宝する。ここは、それが焼き上がるのも待ち遠しく、茶漬けで飯を食べ終えたのであろう。

夕べのごみを二階から掃^{はく}

団友

三才14 雑

〔句意〕夕方にたまったごみを二階から掃いていく。

〔付合〕①前句を仕事の合間の簡易な食と見込み、②宿屋などに奉公する者の労働を想定し、③夕べの塵を二階から掃くとした。

〔備考〕「ごみ」は、本来は水中の泥をいい、転じて塵・屑の類をさす。一般の家屋にまだ「二階」は少ないので、ここは宿屋などを想定すればよい。

寺に咲百日紅を猿すべり

乙由

三ウ1 夏六月（百日紅）

〔句意〕寺に咲いた百日紅で猿がすべっている。

〔付合〕①前句を寺院でのことと見定め、②掃除をする先の境内へと視点を移し、③百日紅を猿がすべるとした。

〔備考〕「百日紅」はサルスベリの別名で、赤い花が長期にわたって咲くことによる。ミソハギ科の落葉高木で、観賞用として庭園などに植栽される。幹や枝がつるつるして、猿でもすべってしまうというので、サルスベリの名称がある。『毛吹草』『増山井』等に六月の扱い。ここは、実際に猿がすべるのであろう。「塵」前栽（『類船集』）といった連想もあるか。

いつもの声の皿や天目^{てんもく}

支考

三ウ2 雑

〔句意〕いつもの声がする下で、皿や天目が並んでいる。

〔付合〕①前句を猿すべりとも称される百日紅の咲く寺の意に解し、②その寺内に人が集まるさまを想像し、③いつもの声が飛び交う中、皿や茶碗が並べられるとした。

〔備考〕「天目」は「天目茶碗」。本来は茶の湯に用いられるすり鉢の形をした茶碗をいい、茶碗一般に対してもいう。

振袖^{ふりそで}にほれて米春男^{こめつるこ}ども

仄止

三ウ3 雑 恋（振袖・ほれて）

〔句意〕米搗き男たちは振袖姿の娘に惚れ込んでいる。

〔付合〕①前句の声を若い女のものとして、②これに懸想する出入りの職人などを想定し、③米搗きが振袖の娘に惚れるとした。

〔備考〕「振袖」は丈が長く脇を縫い合わせない袖で、また、その袖を付けた着物のこと。男女とも元服以前の者が着たもので、そこから、若い娘や若衆についてもいう。「米春男」は玄米を搗いての精白を業とする男。杵をかついで往来を流して歩き、あるいは、得意先を回るなどして生計を立てた。

関^{せき}の地蔵の恋のたゞのり

反朱

三ウ4 雑 恋（恋）

〔句意〕関の地蔵院あたりで、歌の忠度と同様、恋に夢中となっている。

〔付合〕①前句の振袖を遊女のものに見換え、②遊女へ執念を燃やす男を想定しつつ、振袖から関の地蔵を思い起こし、③忠度が歌に執着したように、そのあたりで「恋の忠度」になっているとした。

〔備考〕「関の地蔵」は、現三重県亀山市関町新所にある真言宗御室派の寺院、九関山宝蔵寺地蔵院で、本尊は日本最古の地蔵菩薩とされる。「関の地蔵さん」に振袖着せて、奈良の大仏に取る」（『鈴鹿馬子唄』）の俗謡でも名高く、

これによって、「振袖」に「関の地蔵」が付くことになる。唄が最初に文字化されるのは、宝永元年刊の『落葉集』とされるものの、唄そのものは、それ以前に広く伝わっていたことであろう。また、『古典俳文学大系 蕉門俳書集二』（集英社 昭和46年刊）が指摘するように、近松作『丹波与作待夜の小室節』には「夕暮は急ぎの人も呼び留むる、色こそ道の関の地蔵」などとあり、近くには色町もあつたことが知られる。一方、「たゞのり」といえば、薩摩守平忠度がすぐに想起されるところで、『千載集』所載歌が読人しらずであることを不満とし、亡霊になって現れる逸話は、謡曲『忠度』によって著名。ここでの「恋のたゞのり」は、恋に執心を燃やす者を意味するのである。詞から詞への連想を中心にした付合である。

あやつりは節供を懸て能イ天氣

唐庭

三ウ5 雑

〔句意〕よい天気の下、節句にかけて操り芝居が行なわれる。

〔付合〕①前句を関の地蔵で聞く恋の話という具合に見換え、②門前で恋に関わる芝居の興行があると考え、③天候にも恵まれた節句のころに操りの芝居があるとした。

〔備考〕「節供」は、本来は節日に天子に供える食物のことで、その祝いの日をさすようになる。「節句」に同じく、人日・上巳・端午・七夕・重陽の五節句のほか、各地に種々のものがある。「節供をかけて」は、節句の日にかかる時期ということ。「あやつり」は操り人形による芝居で、多くは、三味線の音楽を伴奏に、太夫の語る浄瑠璃に合わせ、人形の所作が披露される。

蕎麦も大かたはなのちらく

水甫

三ウ6 秋八月（蕎麦…はな＝蕎麦の花）

〔句意〕蕎麦も全体的に花がちらほら咲き始めている。

〔付合〕①前句を上天氣が続く秋の候と見て、②その時節における農作の様子を想像し、③蕎麦の花が咲き出しているとした。

〔備考〕「蕎麦の花」は『せわ焼草』等に八月の扱い。『通俗志』の「蕎麦」に「植ル七月 花八月 荳九月」とある。ここでの「はな」は蕎麦という一品種をさすため、花の句にはならない。

月夜にもやみにも鶉くなく

支考

三ウ7 秋八月ないし三秋（月夜・鶉） 月の句

〔句意〕月夜にも闇の夜にもあちこちで鶉が鳴いている。

〔付合〕①前句の花の白く印象的なところに注目し、②その視覚に対して、聴覚面で印象的な生類をさぐり、③月の有無によらず多くの鶉が鳴くとした。

〔備考〕「鶉」はキジ科ウズラ属の鳥で、高く響く声で鳴く。『はなひ草』『毛吹草』等には八月の扱い。「鶉く」と重ねることで、方々から鳴き声が聞こえることを強調し、空間的に広がりがある「蕎麦も大かた」のイメージに呼応させたのであろう。

都はなれて秋のさびやう

乙由

三ウ8 三秋（秋）

〔句意〕都を離れた地で、秋の寂びた風情を味わっている。

〔付合〕①前句の夜の鶉という点に着目し、②俊成歌を介して、鶉の音に耳を傾ける隠逸の人を想定し、③都を離れて秋の寂びようを感じているとした。

〔備考〕「さびやう」はさびしげな様子。前掲の堀切実『伊勢新百韻』の俳風（以下に堀切稿と略記）が指摘するように、藤原俊成の「夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」（『千載集』）が踏まえられている（『類撰』）

集』にも「鶉↓野べの秋風・月・深草」と見て、まず間違ひなからう。

何なりと買ふては人にくれてやる

団友

三ウ9 雑

〔句意〕どんな物でも買つては人にあげてしまう。

〔付合〕①前句に秋の寂びを感得する人の姿を見てとり、②その人はものにとられず物欲からも離れていると考え、③何かと物を買つては必要とする人にくれてしまうとした。

軍の中に連歌双六

仄止

三ウ10 雑

〔句意〕戦の陣中では連歌や双六が行なわれている。

〔付合〕①前句を死も覚悟した人の行為と見換え、②戦の合間に遊興するさまを想像し、③陣中で連歌・双六をしているとした。

〔備考〕「双六」は盤上の駒を進めたり取り合ったりする遊技で、賭博に用いられた。連歌も賭け事としての一面をもち(『類船集』に「連歌↑掛物」)、その意味で、双六との並記は自然。

夜明かとおもへば雪の降て居

反朱

三ウ11 冬十一月(雪)

〔句意〕夜が明けたかと思えば雪が降っているのであった。

〔付合〕①前句を出陣前のしばしの楽しみと見て、②その場にふさわしい天象を探り、③雪で夜明けかと思えるほど明るいとした。

門を出れば河千鳥飛

唐庭

三ウ12 冬十月ないし三冬(千鳥)

〔句意〕門を出たら川千鳥の飛ぶのが見える。

〔付合〕①前句を雪が降るのに気づいた人の感慨と見て、②その人が戸外に出て目にする光景を想像し、③門を出て川の千鳥が飛来するのを見るとした。

〔備考〕「千鳥」はチドリ目チドリ科の鳥の総称で、川辺や海辺に群れる習性がある。「河千鳥」は川の近くに生息する千鳥。

花盛寒色過て幾日めぞ

乙由

三ウ13 春三月(花盛・寒色) 花の句

〔句意〕花も盛りの中、今日は寒食を過ぎて何日目だろうか。

〔付合〕①前句を春に目にした千鳥と見換え、②花の定座であることも見据え、その時期に行なわれる行事を探つて、③寒食したのは何日前かと、思いをいたすさまにした。

〔備考〕「寒食」は冬至後百五日目の寒食節をいい、この日は火氣を用いず、冷たい食事をした。

今年の髭が又長うなる

支考

三ウ14 春一月(今年〓新年)

〔句意〕今年になってからの髭がさらに長くなってきた。

〔付合〕①前句を時の推移に感じるさまと見て、②その人が別の何かで時節の変化を実感する場面を考え、③正月から剃らないでいる髭がまた長くなってきたとした。

〔備考〕「今年の髭」は「新年になつてずっとのばし続けた髭の意」(堀切稿)なのであらう。

温飧^{うどん}なりやよけれど節^{せち}の料理立^{ダテ}

水甫

名オ1 春一月(節の料理立)

〔句意〕うどんならばよいのに、お節料理が並んでいる。

〔付合〕①前句を新年になって何日かが過ぎたころと見て、②正月の料理にも飽きてくる様子を想定し、③おせちではなくうどんならよいのに、との願望を一句にした。

〔備考〕「節」は季節の代わり目である節日をいい、とくに正月の節振舞をさすことが多い。「節の料理立」とあるので、ここもその意味に相違なく、「料理立」は「献立」とほぼ同義であろう。

うすべり取れば屏風たをるゝ

団友

名オ2 雑

〔句意〕薄縁を取りはずしたら、屏風が倒れてしまった。

〔付合〕①前句を屋外で行なわれる宴と見込み、②その際に起こった椿事を想像し、③薄縁をはずして屏風が倒れたとした。

〔備考〕「うすべり」は畳表に布でへりを付けた敷物。

やれといふ時に木履^{ぼくり}をすげ掛^かり

仄止

名オ3 雑

〔句意〕「さあ困った」という時に、のんびり下駄の鼻緒をすげかかる。

〔付合〕①前句の好ましくない出来事という点に着目し、②そうした場にならぬ行動をする人物を想定し、③回りの状況などお構いなく、下駄の緒をすげる者がいるとした。

〔備考〕「やれ」は、驚いた時、困った時、ほっとした時などに、思わず口から出る語。「木履」は木製の履き物で、下駄に同じ。「すげる」は穴にひも

などを通し結びつけることで、ここは下駄の鼻緒を結びとめること。「…掛り」はその動作を始めること。

むかひの祖父^{ぢぢ}がこちのやつかい

反朱

名オ4 雑

〔句意〕向かいに住む爺が当方にとっての厄介者である。

〔付合〕①前句の人を自分勝手な性格と見込み、②それを近所に住む困った人物と考え、③お向かいの老人に迷惑するとした。

〔備考〕ここでの「祖父(爺)」は年老いた男性一般の呼称。

死ぬ^{しぬ}身も十夜^{じふや}の内は果報^{くわほう}也

唐庭

名オ5 冬十月(十夜)

〔句意〕もうすぐ死ぬ身でも、十夜の内は幸せなことだ。

〔付合〕①前句の祖父を頑固な人と見て、②その人が信心深いことに想像をめぐらし、③死にそうな身でも十夜をありがたがっているとした。

〔備考〕「十夜」は十夜念仏・十夜法要のこと、十月六日からの十日間、浄土宗の寺で昼夜に行なわれる念仏法要。

つかふた水の道に流るゝ

水甫

名オ6 雑

〔句意〕使った水が道に流れている。

〔付合〕①前句を恬淡と生きる老人の心境と見定め、②その人が日常的なできごとから感慨を覚えるさまを想定し、③生活の水が道に流れているとした。

〔備考〕「つかふた水」は、炊事・洗濯などに使った後の廃水であろう。

鶏にはとりはもみ茶の中を追まわし
名才7 雑

団友

〔句意〕鶏は粉や茶の中を追いかけて回っている。

〔付合〕①前句を農家の庭などのさまと見て、②そこで見られそうな場面を探り、③粉・茶の中を鶏が駆け回るとした。

〔備考〕「もみ茶」は未詳ながら、粉と茶で粉殻・茶殻をさすか、あるいは、粗米と茶葉が庭先にある光景か。

朝日にむきてやみ目かゝゆる

乙由

名才8 雑

〔句意〕朝日に向かい、病んだ目を手でかばっている。

〔付合〕①前句を早朝の光景と見て、②そこにいて朝の光を浴びる人を想定し、③朝日のまぶしさに病み目を押さえるとした。

〔備考〕「やみ目」は目の病気で、病んでいる目もいう。ここでの「かゝゆる」は、手で覆い守ることであろう。

あの人またゝは居ゐるまい若ざかり

支考

名才9 雑

〔句意〕あの人も若い盛りで、ただぼんやりしてはおるまい。

〔付合〕①前句を病に困っている人と見込み、②その人が健康な知り合いについて思いをいたすさまを想定し、③若いあの者は旺盛に立ち回っているだろう、との心中の言を一句とした。

〔備考〕病者とは対照的に血氣盛んな者を出した、向付であろう。「たゝは居るまい」を「まだまだ浮気の種も尽きまい」（堀切稿）と解すれば、恋の情が揺曳することになる。それが次の恋句を呼び出すことになるもの、こ

の一句を恋と見る必要はなからう。

何をおもひの燈籠とうろう更行

仄止

名才10 雑 恋（おもひ）

〔句意〕何を思っているのか、灯籠の下、夜も更けていく。

〔付合〕①前句の人は女性関係に盛んであると見定め、②恋の思いに胸をこがすさまを想定し、③夜が更ける中、灯籠のそばで何かを思っているとした。

〔備考〕「思ひ」に「火」を掛けて恋情を詠むのは、和歌以来の常套。ここもそれを踏まえ、「火の灯籠」と続けたのであろう。

有明の拍子もぬけて曇くもける

反朱

名才11 秋八月ないし三秋（有明） 月の句

〔句意〕有明の月が拍子抜けた感じで曇っている。

〔付合〕①前句の夜が更けるといふ点に注目し、②それから時を経た後の景を想像し、③間が悪く有明月も曇っているとした。

〔備考〕「有明」は日が昇つても残っている有明月。「拍子もぬけて」は、間が悪くて張り合いのないこと。

船にふしみの一夜ひとよ秋風

唐庭

名才12 秋七月ないし三秋（秋風）

〔句意〕秋風の中、船に臥して伏見の一夜を過ごしている。

〔付合〕①前句の中に曇った月を残念に感じる人物の存在を見て、②旅中ゆえ天候に敏感なのであろうと考え、③伏見の船で秋の一夜を明かすとした。

〔備考〕「船にふしみ」は「船に臥し」と「伏見」の掛詞。

主従か同じやうなる長太郎
名才13 雑

水甫

〔句意〕同じように背の高い二人は主従なのであろうか。

〔付合〕①前句の船には多様な乗客がいると見込み、②中でも目立つ存在を取り上げようと考え、③主従らしい長身の二人連れがいるとした。

〔備考〕「長太郎」は中指をさす伊勢地方の方言で、ここでは「背の高い人の意に用いた」（『古典俳文学大系』）と見られる。

卯月の空の寒きあかざり

団友

名才14 夏四月（卯月）

〔句意〕四月の空もまだ寒く、あかぎれが疼いている。

〔付合〕①前句を同じような中指の意に見換え、②指に生じる皮膚の病を探つて、③四月なのにまだ寒くあかぎれが疼くとした。

〔備考〕「あかざり」は「あかぎれ」に同じく、手足の皮膚が寒さなどに荒れて亀裂を生じる状態。「長太郎（＝中指）」からの連想であるに相違なく、堀切稿が指摘するように、「卯月」へ「疼き」を言い掛けるという古風な言語遊技」が見られる。

むらくと縄手の麦のあからみて

乙由

名ウ1 夏四月ないし三夏（麦のあからみて）

〔句意〕畦道の向こうでは麦が赤く熟して群々としている。

〔付合〕①前句の卯月の空という点に着目し、②しだいに暑くなり、作物も生育していくことを想像し、③畦から見る一群の麦も赤らんでいるとした。

〔備考〕「むらく」は群をなしているさま。「縄手」は田の間の道。「麦のあからみ」は麦の穂が熟すること。「麦」は諸書に四月の扱いで、「麦刈」は

四月・五月・六月と扱いが分かれる。

小さい比丘尼の鎧持に付

支考

名ウ2 雑

〔句意〕小さな比丘尼が鎧持に付くようにしている。

〔付合〕①前句を通りかかった者の目にする景ととらえ、②農村を行く変わった組み合わせを思い描き、③小柄な比丘尼が鎧持の後を歩いているとした。

〔備考〕「比丘尼」は出家得度して具足戒を受けた女性の僧で、尼僧姿をした下級の遊女をもう。これを後者と見れば、恋の句ともなるか。「鎧持」は武士の外出時に鎧を持つて従う者。

立酒にあかぬ別れの鯨汁

仄止

名ウ3 雑恋（あかぬ別れ）

〔句意〕別れがたい別れを忍び、泥鰯汁を肴に出立の酒を飲む。

〔付合〕①前句を遊女と一夜を過ごしたものと見換え、②翌朝の別れる場面を想定し、③酒に泥鰯汁で離別を惜しむとした。

〔備考〕「立酒」は出発に際して飲む酒。「あかぬ別れ」は歌語で、名残つきの別離のこと。「鯨汁」は泥鰯を入れた味噌汁。「家のながれたあとを見に行 利牛／鯨汁わかい者よりよくなりて 芭蕉」（『すみだはら』『空豆の』歌仙）の例もあるように、これは滋養強壮によいものとされていた。

日は照ながら霰ばらつく

反朱

名ウ4 冬十一月（霰）

〔句意〕日は照っているながら霰がばらついている。

〔付合〕①前句に立ち去りがたい心情を見てとり、②その思いを募らせる天

象を想像し、③日は出ているのに霰が降るとした。

〔備考〕「ばらつく」は雨・霰などが少し降ること。

狸ではないか山路を行坊主

団友

名ウ5 雑

〔句意〕山道に行く坊主は狸ではあるまいか。

〔付合〕①前句のやや変わった天候という点に目をつけ、②これに似つかわしい妖しの存在を想定した上で、③山路に行く僧が狸の化けたもののよう

林の中の家に火を焼

乙由

名ウ6 雑

〔句意〕林の中の家で火を焚いている。

〔付合〕①前句を人里離れて暮らす修行者と見て、②その人の日常生活を思いやり、③林下の家で火を使うとした。

〔備考〕ここでの「火を焼」は、竈や炉で火を焚くことであろう。

花は今星のひかりに咲揃ひ

支考

名ウ7 春三月(花) 花の句

〔句意〕花は今や、星の光の下ですっかり咲き揃っている。

〔付合〕①前句を夜分のことと見込み、②戸外のありさまへと目を転じ、③星光の下、花も満開であるとした。

新百韻の柳うぐひす

執筆

挙句 春一月ないし三春(柳・うぐひす)

〔句意〕柳に鶯が鳴き、『新百韻』の成就を祝う。

〔付合〕①前句に春爛漫とした気分を看取し、②これにふさわしい景物を探るとともに、百韻が巻き上がることも考慮に入れ、③柳や鶯を楽しみながら『新百韻』も完成したとした。

〔備考〕「新百韻」は『勢新百韻』のことに相違なく、この書名が興行の際には付いていたことが察知される。その名称を句中に掲げつつ、春の景物を代表する「柳」「うぐいす」を並べることで、祝意を込めたものであろう。

以上の分析に基づきながら、本書の特色がどのような点にあるかを考えていきたい。本稿(上)の冒頭にも記した通り、「芭蕉没から四年の歳月を経て、芭蕉流の俳諧が変容しはじめていくかどうか、大きな興味の対象となる」のであるから、まずは、芭蕉が「かるみ」を志向・実践した時期の連句作品について、その傾向をおさえておく必要がある。これまでに発表してきた諸稿から、要点をまとめておくことにしよう。

付合における「かるみ」の解明を研究課題に設定して、最初に対象にしたのは、『すみだはら』(元禄七年奥)の「むめがゝに」歌仙である(本誌50集所載「『すみだはら』「むめがゝに」歌仙分析」)。各付合の分析を通して得られたのは、第一に、多くの句は一つの事物・事象をさらりと提示するだけであること、第二に、付合の過程ではきわめて高度な想像力の駆使がなされていること、の二点であった。この二つは表裏一体の関係にあり、複雑な思考の過程を句の表面から消し去った結果、読者の前に示される付合は、断片的な内容の二句がただ並んだだけのようにも見えるわけである。読者の脳裡でその過程に思いが至った時、句と句の間には一気に豊かな世界が広がっていくのであり、その点をたしかめようとせず、付合を禅機的なひらめきで成り立っているかのように見るのは、明らかな誤解といわざるをえない。

そして、そのような付け方を可能にしたのは、①における前句の見極めのたしかさであり、②において新たな局面を思い描く想像力の大胆さと繊細さであり、③における具象化の際の独自性などであった。

これらがこの時期の芭蕉連句に共通することなのかどうかを確認するため、次に、『別座鋪』（元禄七年奥）の「紫陽草や」歌仙を分析の対象とした（本誌51集所載『別座鋪』『紫陽草や』歌仙分析）。その結果、「むめがゝに」歌仙との間には、いくつかの小さからぬ相違点が浮上することとなった。もちろん、わかりやすく平明な表現で、庶民を中心とした生活の断面をうまくとらえていることなど、両歌仙には共通する側面も多く見られ、三段階の付け方も双方に共有されているという点で間違いない。それでも、子細に検討すると、相応の違いがあることも明らかになってくる。「紫陽草や」歌仙で目につくことの①に、②の想定と③の句姿がほとんど一体化した付合ということがあり、換言すれば、自分が脳裡で思い描いたことに満足し、ここからの発展を図ることなく、ただちに句を成したものが多く、ということになる。また、②の想定に必然性を認めたい付合という問題もあり、それは、前句から離すことを急ぎ、前句自体の吟味が十分でないか、または、その吟味を付句の形象面にいかし切れていないためなのであろう。さらに、転じの悪いところが少なからずあり、類似した内容がくり返されるという点も、この歌仙の難点といわざるをえない。同じく「かるみ」唱導期の芭蕉一座作品であるからといって、単純に同一視してはならないわけである。

そこで、「むめがゝに」歌仙以外の『すみだはら』所収連句にも目を向けてみた（本誌52集所載『すみだはら』所収連句の傾向）。その結果、浮かび上がってくるのは、表現や内容の面での類似が一書中の随所に見られる、という問題であった。表現上は擬態語・畳語の類が多用され、内容的には家庭内のいざこざといった話題が、手を変え品を変えといった趣で、何度も取

り上げられている。そうした場面を中心に、三句がらみに陥った箇所もあり、三段階の分析でいえば、やはり②と③の距離が短いものが少なからずある。世にありがちな話題を扱うことの難しさ、ここにはあるのであって、作者としては、身近なことだけに趣向を立てやすく、その段階で抱いた想定から離れがなくなってしまう。そのために、②と③がほとんど一体化して、転じも悪くなってしまうわけである。「むめがゝに」歌仙の場合、とくに芭蕉句に見られる平明さは、複雑な思考活動を経ながら、最後に潔い捨象と昇華を伴って実現されたものであった。その過程がおろそかになれば、陳腐な付合の目に立つようになるのも、道理といわなければならない。同時代的に見て、『すみだはら』がすぐれた作品集であることは、いうまでもないことながら、その中にも欠点は見られるわけであり、野坡らの「かるみ」理解が芭蕉のそれには及んでいなかったということでもある。

続いて、杉風ら深川連衆の場合はどうかという関心から、『別座鋪』と『続別座敷』（元禄十三年奥）の全体を調査の対象とした（本誌54集所載『かるみ』継承の一態——『別座鋪』『続別座敷』の分析から——）。予想された通り、ここでも素材の偏重があり、身近でささやかな出来事が全体を覆っているといっても過言ではない。これに②と③の接近が加われば、ありふれて精細を欠いた、へ世間話の俳諧といったものになってしまう。しかも、各連衆は、そこから世代・階層・職種などによる共通性を探り、時に世間一般のこととして語りがちでもある。その傾向は、『別座鋪』から六年後の『続別座敷』により顕著で、芭蕉没後の「かるみ」のありようが思いやられるのもあった。もう一つ、深川連衆の作品から明らかとなるのは、恋の句が僅少で、とくに『続別座敷』では、「妹」「簪」などの語による形式的な恋の一句を入れるだけとなることである。それは、「付がたからん時はしめて付ずとも、一句にても捨よ」（『去来抄』）という芭蕉の教えが拡大解釈され、「いよく」大切におもふ故也」

(同)の部分が等閑視されてしまったからに相違なからう。擬態語・疊語類の使用や、瑣事への関心を含め、杉風らはこれぞ芭蕉流と確信した方法を守り、揺れるところがない。そして、そのことにより、かえって芭蕉の真意からは離れ、『続別座敷』へと至るのであった。

では、『続別座敷』の二年前に刊行された、『伊新百韻』の場合はどうか、ということになる。支考の場合、元禄七年の伊賀滞在中、『続猿蓑』(元禄十一年刊)の編集を通して、晩年の芭蕉から直接の指導を受けたという事実があり、そのことが芭蕉没後の作品にどう関わっているか、という関心も生まれてくる。ちなみに、『続猿蓑』所収の「八九間」歌仙は推敲過程の知られる一巻であり、芭蕉の添削は、やはり②↓③の過程に現れがちな作者たちの力不足を補い、興味深い付合を生み出しているのであった(佐藤勝明・小林孔『続猿蓑』「八九間」歌仙分析)〈『文芸研究と評論』80 平成23・6(参照)〉。芭蕉の捌きや手直しこそが、一巻の出来を大きく左右する要因であり、「むめがゝに」歌仙と「紫陽草や」歌仙を分けるものもこれであったといえべきかもしれない。なお、同書に支考の参加する歌仙は二巻あり、いずれも上出来の部類に属するといつてよい。佐藤・小林「続猿蓑」夏之夜や「歌仙分析」(『文芸研究と評論』88 平成27・6)より引けば、『すみだはら』に多見され、一種の偏りとして指摘することができる、家庭内のいざこざや職業上の愚痴めいた話題がほとんどなく、『別座鋪』や『続別座敷』に顕著な恋の情の薄い形式的な恋句も見られない」のであり、「高度な思考活動を経て成った付合が多く、具象性の面でもおおむね問題はない」のである。「むめがゝに」歌仙が野坡の俳諧観に大きく関わり、「紫陽草や」歌仙が杉風のその後を規定してもいくように、この興行・編集の経験が支考に影響を与え続けた可能性は十分にある。そうした目をもって『伊新百韻』を見直せば、どのような傾向が浮かび上がってくるのか、以下に記すことにしたい。

まず、擬態語や疊語の類に関しては、「すつぺりと」「ひやくと」「ひらくと」「はらくと」「ちらく」「鶉く」「むらくと」の七例があり、7/100という割合になる。興行ごとの多寡は見られるにせよ、『すみだはら』「むめがゝに」歌仙の7/36や同「兼好も」歌仙の8/36、『別座鋪』「紫陽草や」歌仙の6/36や同「取あげて」歌仙の7/36など、両書の数値が高いことに相違はなく、元禄七年前後の芭蕉周辺では、擬態語や疊語の類を使うことが常態化していたものと察せられる。『続猿蓑』においても、「八九間」歌仙の5/36を筆頭に、一定の使用頻度が確認されるのであり、支考が一座した二歌仙の平均値6・9%は、『伊新百韻』の7・0%とほぼ一致する。以後の美濃派作品などで、擬態語・疊語類がとくに重用されるという事態は見られなくなるものの、芭蕉没後四年の当時にあつては、これも芭蕉流「かるみ」俳諧の一要素として理解されていたのであろう。ちなみに、それから二年後の『続別座敷』でも、各歌仙中に数回の使用は確認され、杉風周辺にあつてもほぼ同様の様相であつたと理解される。そもそも、これらを多用すると自体、芭蕉の「のつと」「むめがゝに」歌仙に追隨するという側面があり、この風潮に嫌気を感じる其角が、「師の「のつと」は誠の「のつと」にして、一句の主なり。門人の「すつと」「きつと」はきつともすつともせず、尤も見苦し」(『旅寝論』)と喝破したように、安易な使用には見苦しさに伴うことにもなりかねない。その意味では、やがて、一巻に数回程度の使用に落ち着くようになるのも、自然な流れということになろう。

先にも記した通り、『すみだはら』や『別座鋪』などに見られた素材の偏重ということ、そして、とくに『続別座敷』に顕著な恋の希薄化ということが、『続猿蓑』にはほとんど共有されていない。それでは、『伊新百韻』の場合はどうなのか、という関心が生じてくる。まず、恋句に関しては、「男ぎらひの膳所に奉公」(初ウ6)・「油断のならぬ高野六十」(初ウ12)・「夜寒に

なりて人もこひしき」(三才6)・姉君にほめかしたる物おもひ」(三才9)・「振袖にほれて米春男ども／関の地蔵の恋のたゞのり」(三ウ3・4)・「何をおもひの燈籠更行」(名才10)・「立酒にあかぬ別れの鯨汁」(名ウ3)といった具合であり、少なく見積もっても、七箇所八句で恋が出現することになる(名ウ2の「比丘尼」などを恋と見れば、句数はさらに高くなる)。しかも、そこには多様な恋の情が盛り込まれており、形式的に「娘」「賀」などの語を使っただけということもない。百韻中に七回という高頻度であり、そのほとんどが一句であることから、「付がたからん時はしゐて付ずとも、一句にても捨よ。かくいふも、何とぞ巻面の能、恋句も度々出よかしとおもふゆへ也」(『去来抄』)という芭蕉の発言が想起されるところであり、支考らはこれを忠実に守ったのか、とも思われてくる。蕉門撰集を広く見渡しても、恋を格別軽視するような傾向は見いだせず、希薄化・形式化する恋は、杉風周辺の『続別座敷』などに限った現象といつてよさそうである。

話題の偏重という点で、『すみだはら』に指摘できるのは、嫁と姑の問題に象徴されるような、家庭内ドラマともいうべき内容が、所収連句八巻の随所に見られることであり、奉公先でのいやがらせなど、労働上の労苦もまた多く見られることである。それは、「嫁」「弟」「父」「お袋」「祖父」「祖母」などの家庭内における呼称や、「お頭」「牢人」「医者」「小僧」「番匠」などの職業的な名称が多見されることも連動するのであり、『別座鋪』『続別座敷』からも同様の事態が確認される。ちなみにいうと、『猿蓑』の四歌仙には家庭内呼称の使用が一例もなく、家族のいざこざといった場面もほとんど描かれていない。『猿蓑』的な世界と『すみだはら』的な世界の懸隔を、象徴する一事というべきであろう。その点で、『勢新百韻』の場合、「姉君」「祖父」の用例があり、後者に近いということにはなるものの、目に立つというほどではなく、家庭内ドラマが頻出するわけでもない(しいて挙げれば、「む

かひの祖父がこちのやつかひ」(名才4)に、それと類似したご近所ドラマが感知される程度である)。また、「生ざかな売」「小僧」「飛脚」「振袖」「米春男」「比丘尼」「鍵持」「坊主」などの職業的呼称にしても、かえって世態人情の多様性を表すことに貢献し、渡世のつらさを示すといった方向には向かわない。その意味では、やはり、多様な人事を扱う『続猿蓑』(とくに支考参加の二歌仙)に近い一巻と位置づけられそうである。

しかし、だからといって、この百韻には発想や表現方法のくり返しがまるで見られない、ということにはならない。まず、口調の点からいうと、心の中のつぶやきを一句にまとめた、という趣の句がかなりの数になる。「あそこに行はさきの綿帽子／から風のけふは初午寒いはず／去年の餅の今に残念」(二才8・10)などがその典型であり、「あそこへ行くのは先に見かけた綿帽子の人だ」「空つ風の吹く今日は初午だもの、寒いはずだ」「去年の餅が今も残念でならない」と、まさに独り言の連続といった恰好である。また、「もう…夜の明る也」(初才4)・「どちらやら」(初ウ1)・「いかい門構え」(初ウ3)・「とや角として」(初ウ10)・「長助殿は今の…」(三才2)・「幾日めぞ」(三ウ13)・「又長うなる」(三ウ14)・「温飩なりやよけれど」(四才1)・「たゞは居ルまい」(名才9)・「狸ではないか」(名ウ5)など、いかにも語り口調であることを感じさせる句も少なくない。日常卑近な話題を取り上げがちなことが、これに相まって、まさに〈世間話の俳諧〉ともいうべき付合が随所に展開する。後で飲酒するために蒲鉾を残すという小市民的な思惑(「とや角として月は出たる／かまぼこを残すは後に吞合点」〈初ウ10・11〉)や、場を離れた者への悪口というありがちな行為(「手間もいらすに顔に年寄／小便をして居ものをそしり出し」〈二ウ12・13〉)など、人情をうがって興味深い付合も、あまり頻出すれば停滞感を生み出すことになる。その点、『勢新百韻』では適度な抑制が利き、「琵琶をさし置」(三才10)が暗示する高貴な

家柄、「軍の中に」(三ウ10)の戦陣などが、一般庶民の暮らしとは異なる色合いを見せている。「畠の瓜の日に照られ居る」(初ウ4)・「冬至の梅の先咲て居る」(二ウ6)・「夜更の雪のひらく」と降」(二ウ14)・「つかふた水の道に流るゝ」(名オ6)など、ありのままを詠んだ景気句がところどころに配されることも、その意味で、相応の効果を挙げていよう。それでも、全体的に見れば、日常生活のありふれた一齣に目を向けることが圧倒的に多く、「人にはぐれて」(初ウ2)・「一足のちがひで」(初ウ5)・「今に残念」(二オ10)・「ひねになりたる」(二ウ9)・「釣そこなひて」(三オ12)など、がっかりした感じをとらえた句の多いことも、一つの特徴といえる。それは、本書が多様性を保持する中にも、『別座鋪』などと同様、「低・小・卑といった傾向を示しがちである」(前掲「「かるみ」継承の一態」ということでもある。

付け方に関しては、「唯、前句は是これいかなる場、いかなる人と、其業・其位くらゐを能見定め、前句をつけはなしてつくべし」(『去来抄』)という芭蕉流のそれに、基本的には沿うものといつてよい。それは、すなわち、三段階の分析にもよく耐えるということであり、たとえば、「咲初る秋海棠に今朝の月／風ひやくと生ざかな売」(初オ7・8)の場合、前句に早朝の気配を読み、そこに朝が早い行商の人を想定したから、この付句が生まれ得たのであって、「生ざかな売」の選択には十分な理由があったことになる。「男ぎらひの膳所に奉公／菊の日のきぢん返しに浅黄うら」(初ウ6・7)にしても、前句の女性に地道に暮らす物堅い性格を見たからこそ、その人の具体的な行為として、出替には相応の身なりで臨むとしたのであり、よく「位」を見定めているといつて間違いない。総体的には、各連衆とも、こうした付合の機構を心得ていると見てよさそうである。

ただし、「前句をつけはなしてつく」ことに急となったためか、題材の選択に必然性を感じられず、強引との印象が残る付合も、また相応にある。た

とえば、「鶏はもみ茶の中を追まわし／朝日にむきてやみ目かゝゆる」(名オ7・8)の場合、「鶏」から「朝日」を導くのは常套ながら、そこにいる人が眼病である理由が、この付合の中では理解できない。「畠の瓜の日に照られ居る／一足のちがひで船を出して行」(初ウ4・5)にしても、前句の景を目に留めたのが旅人であるとしたのはよいとして、船に乗り遅れた場面に形象することの正当性が、これだけでは説明できない。『別座鋪』『紫陽草や』歌仙などにも指摘できたことであり、それは、①↓②における見極めと熟考に欠けるところがあつたということである(②↓③における形象の甘さが見られる箇所も、同様に少なくない)。また、「掃除日の箒持たる小僧ども／芥子の盛の四月中旬」(二オ5・6)のように、詞の連想(『類船集』『小坊主↑芥子』)に頼った付けも散見され、「芭蕉葉の手をひるがへす秋の風／我身ながらも三味線に飽／から紙を明れば畳揚てあり」(二ウ1・3)にいたっては、「秋」から「飽き」、「飽く」から「明く(開く)」が導かれたという恰好である。それは、堀切稿が指摘する、本書の言語遊戯的側面ということに関わる問題でもあり、「卑俗な談理と笑いの方法」(同稿)を含め、百韻一卷の中にもさまざまな要素が混在していることになる。さらに考える余地は少なくないことながら、それでも、本書が芭蕉流「かるみ」の基本を押さえていることに疑いはなく、興味深い一巻ということになる。

〔付記〕 本稿は、平成二十七年科学費補助金による研究課題「芭蕉五十回忌に至る「かるみ」の継承と伝播に関する研究」(課題番号：21520200)の成果の一部である。

佐藤 勝明(和洋女子大学 人文社会科学系 教授)

(平成二十七年十月六日受理)